## 第３節　構成要素

柴田氏庭園の本来の屋敷範囲は現在の名勝指定範囲より広い。本節では名勝指定範囲に加え、旧屋敷地の範囲のすべて、およびその周辺までを含めた柴田氏庭園の構成要素について述べる。構成要素には様々なものがあるが、庭園の空間構成を「庭園」「建造物区域」「外周」「前庭」「エントランス」「その他」の６つのゾーンに大きく区分し（図３）、ゾーンごとの内容を以下に記述する。

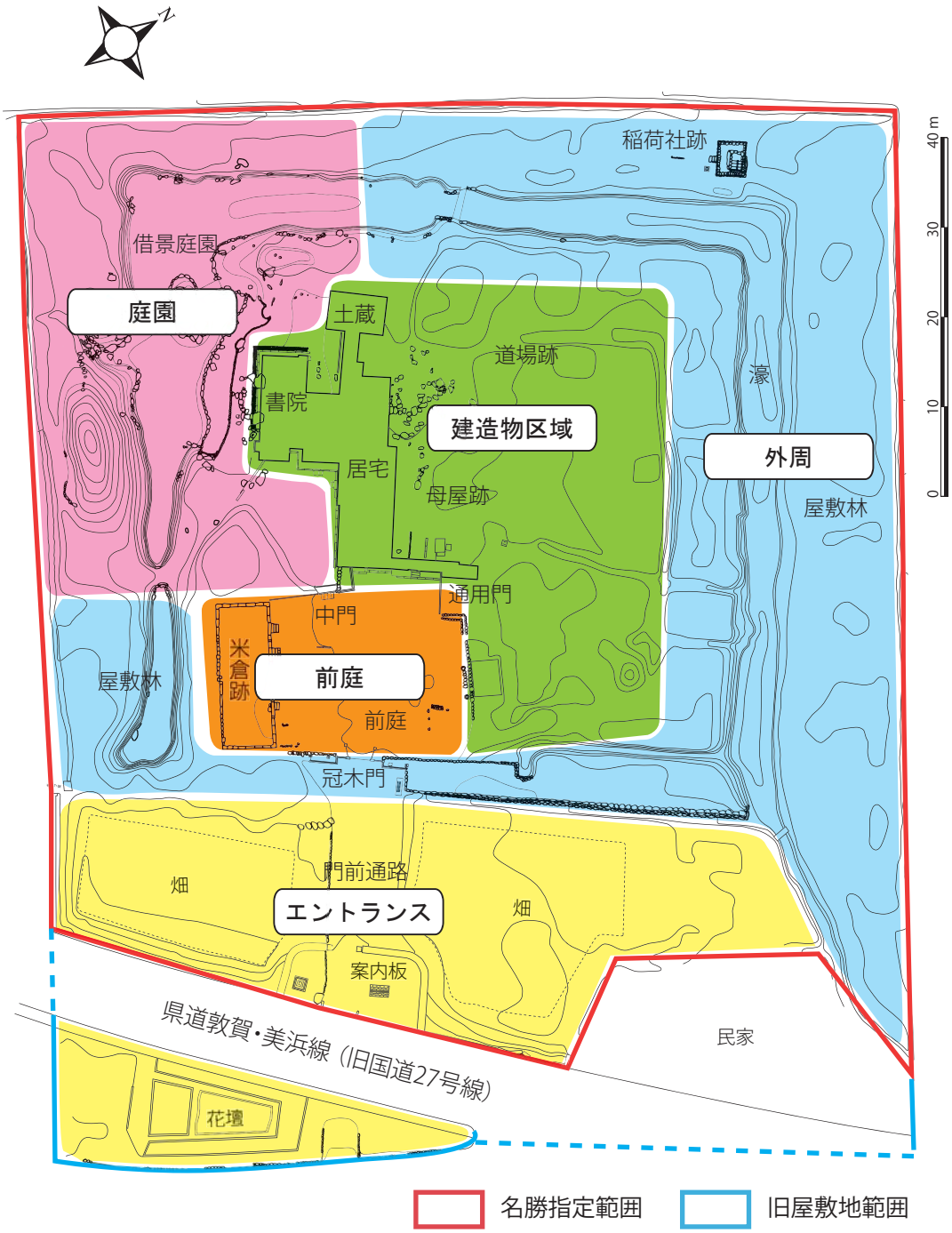


図３　柴田氏庭園のゾーニング

（１）庭園

借景庭園（写真４）を中心としたゾーン。屋敷地の中では昭和７年当初からの指定個所であり、柴田氏庭園の中核をなす。

写真４　借景庭園

【借景庭園】

野坂山を背景とする池泉式の借景庭園。屋敷の西南面の濠の一部を園池として取り込み、背後の土塁を築山に見立てて造られており、北岸（書院側）は栗石敷の浜（写真５）となっている。濠を利用しているため、園池は東西に細長く、岸辺はやや急勾配となっている。築山には滝石組を設け、園池の中に中島（写真６）を作って橋を架けている。回遊できるようになっているが、全体的には書院からの観賞を本位とする庭園である。池を前景に、築山の樹間を越えて、「敦賀富士」の異称を持つ野坂山をはるかに遠望することができる（写真７）。

写真５　栗石敷の州浜

写真６　築山より中島を望む

写真７　野坂山の借景

写真８　市野々新田絵図（部分）

本庭園の造営年代については、護岸や飛石の手法といった庭園様式の見地から、元禄期に位置づける見解がある（重森 1936）。しかし、史料等からの裏付けは未だ得られていない。最も古い絵図であり、貞享頃に描かれたと思われる「市野々新田絵図」（写真３・８）には、庭園は描かれておらず、外濠に沿って黒松と思われる針葉樹が描かれているのみである。

庭園の存在を判読できる最も古い絵図は、江戸時代後半ごろと推測される「柴田氏屋敷図」（写真９）である。書院部分に縮尺等を記した付箋が貼られていることから、書院改築に関連する絵図の可能性が高い。この絵図では、庭園について「ツキ山」、「滝口」などの書き込みがみられる。しかし、その位置は大雑把なもので、詳細は不明である。これらの史料では、借景庭園は屋敷の周溝を利用して江戸期に作られたこと、屋敷地の他の植生には竹林や黒松があったこと程度しか推定できない。

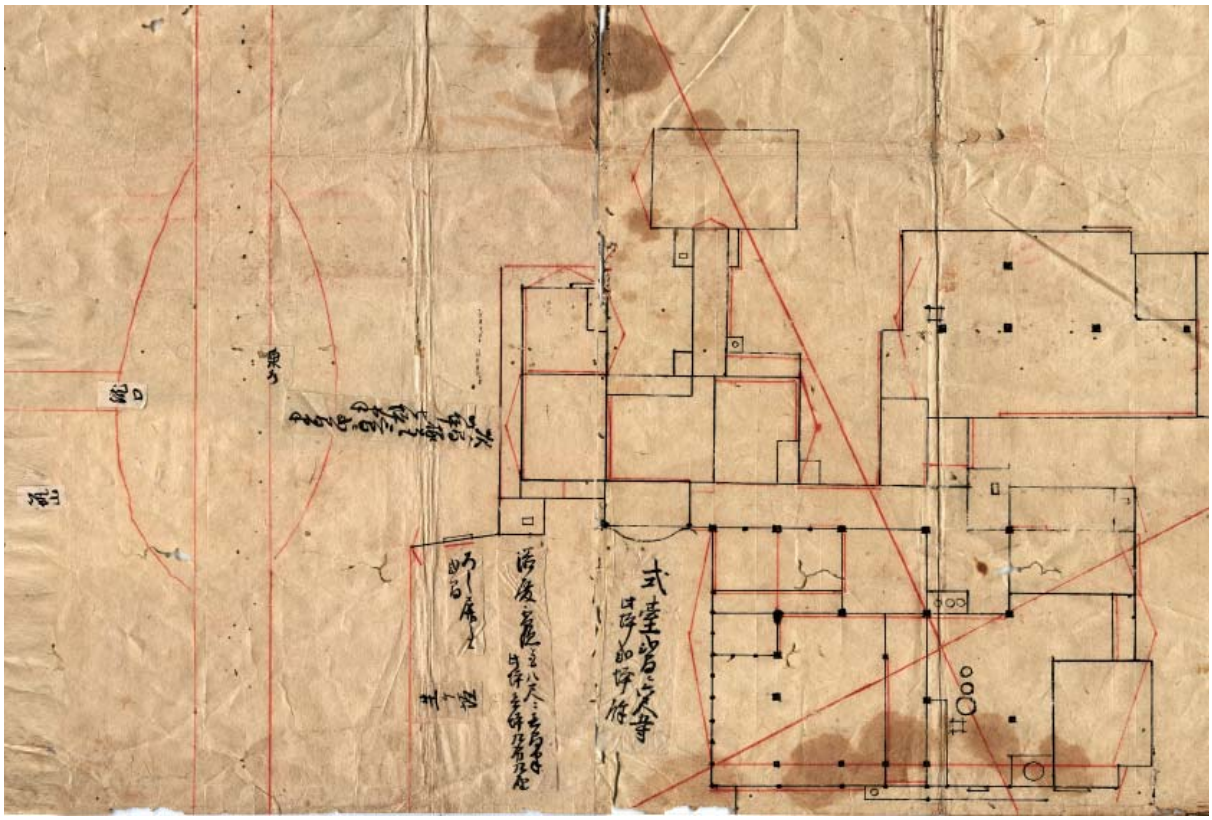

写真９　柴田氏屋敷図（部分）

庭の詳細が記録されているもっとも確実な資料は、『日本庭園史図鑑』（重森 1936）所収の実測図（図４）と写真（写真１０～１４）である。実測図は昭和１１ 年のもので、約７０年前の本庭園の姿を記録したものである。この図と現在の書院前庭園の地割に大きな変化はみられず、現在の庭園は当時から変わらず維持されてきていると判断できる。

相違点としては

・書院北西のクロマツと栗石敷浜のサルスベリの成長が顕著である。

・低木の管理状態を古写真と比較すると、現在のほうが小ぶりに仕立てられている。箱刈込みから現在は丸みのある半透し剪定になっている。

といった点を挙げることができる。

その他、敦賀市管理下において行われた補修の詳細は（表３）のとおりである。

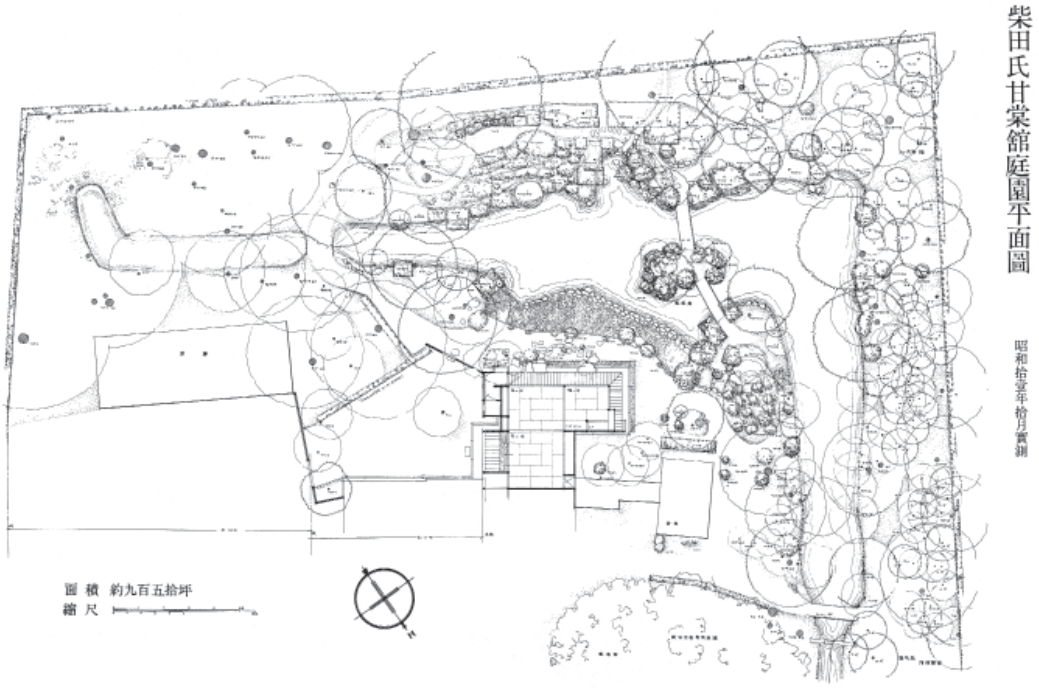


図４　「日本庭園史図鑑」所収の実測図（昭和１１年実測）

表３　柴田氏庭園における修理、調査一覧

| | |
|---|---|
| 昭和 28 年度 | 保存修理工事　橋の架替５基，樹木の手入れ，磯浜・池・堀川清掃，泥土除去 |
| 昭和 39 年度 | 書院屋根銅板葺替工事 |
| 昭和 47 ～ 48 年度 | 保存整備事業　標柱移転，庭木剪定，竹柵設置，池底漆喰工，橋架替３基，生垣補修，堀川泥土除去，格子戸外板防腐剤塗布 |
| 昭和 56 ～ 60 年度 | 地形測量調査実施　福井県教育委員会 |
| 昭和 57 年 12 月 | 保存整備事業　中門解体復元，書院内壁・天井・戸襖修理，外廻り土台修理，南縁戸袋修理，屋根雨漏修理，池復元修理，木造橋架替，書院畳修理，生垣整備，植栽，境界土留工 |
| 平成３年度 | 旧母屋跡等の発掘調査実施 |
| 平成 19 ～ 22 年度 | 緊急保存整備事業　通用門・土蔵解体復元 |

写真１０　西面より書院を望む（昭和１１年）

写真１１　紅梅岡より見たる刈り込みの背景樹（昭和１１年）

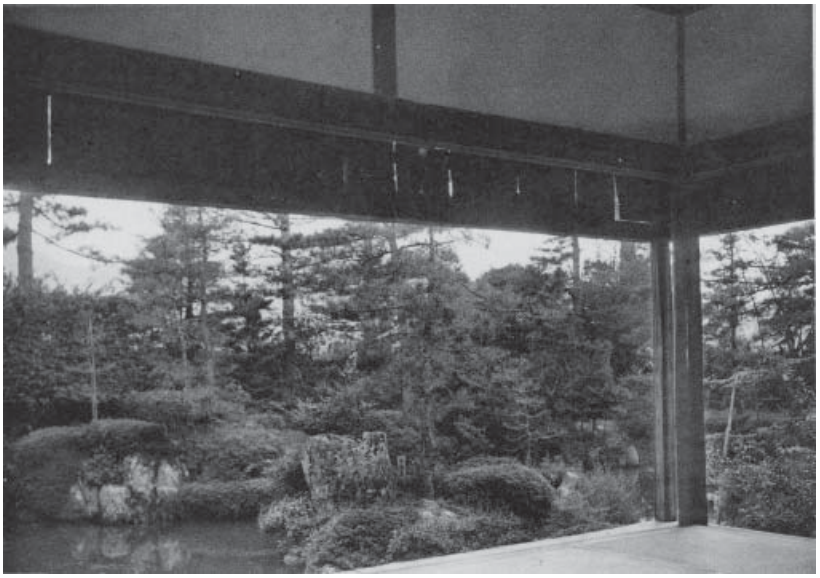

写真１２　書院より西面中島を望む（昭和１１年）

写真１３　中島石組、蓬莱島を望む（昭和１１年）

写真１４　滝組護岸石組手法（昭和１１年）